

第97号  
平成29年  
2月

HPに 創刊号から  
連載中

## もう一つの道

情報は、うのみにせず、注意深く徐々に試して下さい。

山田整骨院  
熊本市中央区出水 4-25-1  
096-364-7611

<http://yamadasu.com/>

[熊本交通事故, 山田整骨院](http://www.jiko-kumamoto.net/)

<http://www.jiko-kumamoto.net/>

### “朝食抜き”の青年関東軍を動かす 尾藤 章 著 宿便と潜在意識と (昭和58年発行)

#### 月刊西医学 昭和48年11月号掲載

静岡の関根宏先生は、私と同じ昭和七年に静岡西会に入会いたしました。私より十歳も年長です。で八十の余になりますが、いまなお元気で関根化学研究所をやっておられます。西医学に非常に熱心でしたが、県立静岡工校の教師として、生徒にも西医学をよく指導されました。試験の問題に、

一、クリマグの効能を上げよ。

一、毛管運動の効果を書け。

などなど。当時その話を聞いて愉快なことだと思いました。

朝食廃止の二食主義もこれまた生徒に指導いたしました。もちろん強制ではありませんのでやる生徒もあり、やらない生徒もたくさんあったと思います。たまたま当市手越の横地茂という生徒は学科の方も優等生でしたが、関根先生が指導される西医学も忠実に実行された一人です。この横地君が敢然と朝食を廃止して二食主義となりましたが、二食主義になってしばらくしてから学校でマラソン競走があり、横地君は、みごとにこれに優勝したそうです。関根先生は平素口数の少ない方でしたが、目を細めて、

「朝食抜きは、生徒にもたいへんよいですよ」と話されました。

この横地茂君が、工業高校を卒業してしばらく経って徴兵検査、そしてみごと甲種合格。兵庫県加古川の連隊に入営することになりました。その入営の日、横地君は班長に向かって、

「班長殿、横地は西式で朝食は食わず二食できましたので、軍隊に入っても朝食は食いたくないのであります」と。班長は驚いて、「横地、もう一度いって見ろ」といいました。

「ハイ、横地は軍隊に入っても、朝食は食いたくないのであります」班長は、更に「もう一度、いって見ろ」といった。横地君は依然、「食いたくないのであります」をくり返しました。

それで班長は横地君に、「軍隊という所は、他の社会と違って労働が非常に激しい。今まで家では二食で耐え得たかもしれないが、軍隊生活はそれは無理だ。二食では軍隊生活は絶対にできません。そんな無茶なことはいかな」となだめ教えたが、横地君は、頑として初心を変えず、「横地は軍隊でも、朝食を食べたくないであります」とうとう、班長は根負けして、「ようし、俺について来い」と中隊長室に横地君をつれて行き、「中隊長殿にいって見ろ」といったので、また、「中隊長殿、横地は朝食を食べたくないであります」といった。これには、中隊長も驚いて、「今一度」「今一度」と三度いさせたそうです。そこで中隊長は、「よし、よくわかった。それでは、お前には朝食は食べさせないことにする。いくら苦しくともベソをかくな。泣いても絶対に朝食をくれないぞ」ということになりました。中隊長は中隊長全員を集めて、その前に横地二等兵を立たせ「この男は横地二等兵である。自分からどうしても朝食を食べたくないというから、朝食を食べさせないことにした。横地には朝食を与えてはいけない。横地が朝食を食べないよう、全員で監視せよ」ということになりました。

昼と夕の二回の食事は、他の兵隊といっしょで同じものを食べましたが、食器に盛る飯の量も神様でないので、皆均一同じとはいかない。多少の多い、少ないはあったようですが、誠に皮肉なことに横地君の食べる食器には、他の兵隊の食べる食器の量より飯が少なめの時が多かったといわれます。

初年兵訓練は、誠に激しく想像以上の猛労働の日が続いた。漸く一日の訓練が終わって、

「ようし、今日の訓練はこれで終わり、最後に一同で営庭を一周。かけ足」

一同歯をくいしばってかけ足で営庭を一周する。「ようし。これで終わり。横地二等兵だけ、今一周」という具合で、朝食抜きの横地君は、文字通りにさんざんに痛めつけられたそうです。いくら腹が減っても、中隊の全員が監視ですから、内緒で何一つ食べることはできない。演習の重労働は横地君には特別に厳しく、遂にヘトヘトに疲れて一日一日と目に見えて瘠せていったそうです。忽ちのうちに入営当時に比べて体重が一貫五百匁（五・六キロ）も減ったそうです。

そのうち演習の重労働も次第に慣れて来て、少しずつながら身体にも精神面にもゆとりができてきて体重もそれ以上は減少せず、暫くするうち体重もごく僅かずつながら増して行ったそうです。そして、入営後一カ月半経過しますと、一時は一貫五百匁（五・六キロ）も減った体重が、次第に盛り返して入営時の体重になったそうです。

それからは依然朝食抜きの二食ですが少しずつ肥って体重が日に日に増していきました。工校時代優等生であった横地君のことです。軍隊生活でも抜群の模範兵となりました。サア、たいへんです。驚いたのは軍医を初め連隊の首脳陣です。「朝食抜きの二食では、絶対に軍隊の激しい勤務演習はでき得ない」という見解は完全に覆がえされたのです。

やがてこのことは師団の問題となり、更に上層部の問題になったことでしょう。

当時満州における関東軍の力は異状なまでに強固なものであったようです。陸軍省や参謀本部でも、ちょっと押え切れない程の力があつたように思われます。蘆江橋事件。張作霖が乗った列車が爆破されて将軍は死亡、いわゆる満州事変で満州帝国が誕生、溥儀氏が満州国皇帝となった。もちろんこれは日本の関東軍の演じた仕事と思いますが、関東軍では、西先生を満州に招請して、西医学の講演会を開催して将校たちを指導されました。

皇帝溥儀氏を初め、満州国要人はすべて医学は西医学で、指導者は西先生。道徳は二宮尊徳の報徳教を決め、満州国の要人が静岡県庵原郡庵原村の片平七太郎氏（当時静岡県西会会長）の許へ来られて、報徳教の教義を聞かれたと聞いております。

皇帝溥儀氏は、西先生の直接ご指導で、平床、硬枕はもとより、二食。そして水風呂をつくって温冷浴もやられたようです。西先生から伺いましたが、溥儀皇帝が風邪を引かれたときのこと、

「西先生、私、三七度半の熱があります。それでも水風呂から入るのです？」ときかれたそうですが、先生は、「大丈夫でございます。安心してお水からおはいりください。西がついております」と、西先生は声色を使って、私どもによく話してくださいました。

関東軍が西医学を取り入れた根本の原因には、静岡から加古川の連隊に入隊した横地茂君の成績、実証が大いに役立っているように思われます。しかしその後間もなく敗戦。そして終戦。満州帝国は水の泡のように消え去りました。

芭蕉の句「夏草や つわものどもの 夢のあと」になりました。静岡工校出身の横地茂君はニューギニアに転戦、名誉の戦死を遂げられました。私は横地君を指導した関根老教師と手を取り合つて「よい男だったなあ！」と語り合い、静かに彼の冥福を祈りました。

## あ と が き

西式健康法は 昼夕の二食主義です。食べる必要のない朝食は、余計な物を摂るので有害としています。西先生には「二食主義健康法」という著作がある程重要ということです。西先生は工学博士であり、物理学的化学的に研究された上での理論です。西式には生食法という食事法があり、これは原子爆弾の理論である、熱力学第二法則に基づいています。森美智代さんはこれを実践して一日一杯の生野菜青汁で20年以上健康に生活しています。この投稿を読んで整骨院の研修で1ヶ月5キロ痩せたことを思い出しました。肉体的にも精神的にも非常に厳しい修業でしたので、胃腸に余計な負担をかけてはいけなと、生野菜青汁と玄米の少食にしました。1ヶ月で5キロ、3ヶ月で8キロ痩せました。しかし、体調はすごく良く頭も体もよく働きました。金がなくてたくさん働く必要のある人にはお勧めです。最後に横地さんの名誉の戦死が取り上げられ切ない思いがしましたが、「よい男だったなあ」と語り合われたとのことで慰められました。合掌。